

# アウシュビッツ画家展 野村路子

都内で3月〜4月に「アウシュビッツを描いた画家M・コシチュエルニャック展」が開かれた。実際に、アウシュビッツの地獄の生活を経験して幸いにも生き残ったポーランドの画家の作品を展示したもので、その作品は、私が所蔵している。

200枚を超えるアンケートが寄せられたが、そこに書き足らなかったのか、私のホームページ宛てに、あの絵を見たときの衝撃、日がたつてあたらめて湧いてきた感動などを伝えるメッセージが届く。

## ◇重なる思い

「なぜ人は、あんなにも残酷になれるのか。ホロコーストについてはずっとそう思っていたが、今は、なぜ人は、あの極限状態のよつな中でも

自らの尊厳を保ち、美しく生きることができたのか、を考えるようになった」と書いた人がいた。

「今もまだ、あのコルベ神父の目に見られている気がする。どう生きるか?と問われてきたのだから。

た人(コルベ神父)、その事実を伝えるために、命を危険にさらしながら鉛筆を握った人(M・コシチュエルニャック)の存在を知った25年前から、その問いに答えるために生きてきたのだから。

# 事実が伝える衝撃

「今もまだ、あのコルベ神父の目に見られている気がする。どう生きるか?と問われてきたのだから。」

私は、今年1月、アウシュビッツ解放70周年記念式典に出席してきた。3000人もの生還者が集まった。彼らはみな高齢だ。80代、90代、最高齢者は102歳だと聞いた。

人足らずの人だったと話した時、「そんなに大勢?」と言った若者がいた。およそ30キロ四方という収容所の大きさで、半数が、飢えや過労や衰弱で倒れた。

たという事実も。厳寒のポーランドからドイツへ、果てしない雪原を行く「死の行進」では、半数が、飢えや過労や衰弱で倒れた。

原画は近く、ポーランドに向けて贈ることを決めているが、展覧会の反響は大きく、ぜひ見たいという電話やメールが今も届く。日本での反響の大きさに、感動した駐日ポーランド大使と相談の上、作品のレプリカを日本に残し、今後多くの方に見てもらいたいと考えている。



野村路子さん

のむら・みちこ 1937年生まれ。作家、川越市在住。早稲田大卒。ナチスドイツが占領地のチェコに設置したテレリン収容所の存在を知り取材。「テレリンの小さな画家

たち」「子どもたちのアウシュビッツ」などを刊行した。「テレリンの小さな画家たち」で、産経児童出版文化賞大賞を受賞した。

た「子どもたちのアウシュビッツ」などを刊行した。「テレリンの小さな画家たち」で、産経児童出版文化賞大賞を受賞した。

てくれたのだろう。展覧会では、コルベ神父の肖像とともに、小さな紙に描かれたアメリカ軍最高司令官、アイゼンハワーの姿も多くの人の関心を引いた。コシチュエルニャックを救出したのが彼だったのだ。4月、会場を訪れたアメリカ人の青年は、知らなかったと言った。「70年前のちよど今ごろ、明らかになったホロコーストの事実、もつと世界中の人が知らなければ、覚えておかなければ」と、彼は、アンケート用紙に書き込んでいた。

## 文化ワイド